

書 評

徳永光俊 著

『日本農史研究 上

「生きものの循環」と農法』

農文協

2025年6月10日発行

357頁 定価 3,600円＋税

『日本農史研究 下

「創発する風土」と農学』

農文協

2025年6月20日発行

333頁 定価 3,600円＋税

日本農業普及学会参与

岩元 明久

1 全体の構成

とにかく実に幅広いのである。著者の徳永光俊氏は、大阪経済大学学長を長年勤められ、農文協の『日本農書全集』第Ⅱ期全37巻の共編集者でもある。その徳永氏が農史研究者として取り組んだ大和農法の風土論的研究と書誌学的蘊蓄を総動員して取り組んだ「風土農法」と「風土農学」に関する二部作が本書である。紹介される内容は、713（和銅6）年の「風土記」から2018年の現代アートの鴻池朋子『ハンターギャザラー』に及ぶ、縦糸に「生きものの循環としての創発する風土」、横糸に海外の著書をも含む実に多くの書籍等を取り上げる「これぞ博覧強記」と評すべき大著なのである。

著者も縦糸をたどるのは「直接の引用が多い。うんざりするかもしれないが」「ガマンして読んでいただきたい」と書いているが、紹介されるそれぞれの書籍等の内容は大変興味深く、独立して読んでも十分に読み応えのある内容となっていることは最初に述べておきたい。コラムとして上巻に16本、下巻に10本あるのも楽しい読み物である。ただ惜しむらくは上下巻

700頁に及ぶボリュームなのに索引がなく、なかなかめざす人物等にたどり着けないだろうことである。その後、『大阪経大論集』第76巻4号（2025.11）に、人名と江戸農書名の索引と正誤一覧が掲載されている。オープンアクセスである。重要事項の索引は、次に掲載されることである。

ここで少し長くなるが上下2巻の目次をそれぞれ紹介する。まずは『日本農史研究』全体のイメージをつかんでいただきたい。

『日本農史研究 上 「生きものの循環」と農法』はじめに「生きものの循環」から農法をとらえなおす

第1章 根本原理としての生きものの循環

第1節 江戸農書にみる「忌地」

第2節 江戸農書・安藤昌益にみる生きものの循環

第3節 現代農業者にみる生きものの循環

第4節 「雑草・害虫」から「ただの草・ただの虫」へ

第2章 風土が響存する生きものの循環

第1節 太陽を収穫する緑の設計

第2節 根と微生物と土

第3節 三澤勝衛に学ぶ生きものが響存する風土

第4節 風土からみる農術の構造

第3章 狭義の農法＝農術における内的発達法則

第1節 大和農法の水稲反収と作付方式にみるS字カーブ

第2節 収穫通減の法則とその克服

第3節 いのちの技法としての農術の内的発達法則

第4節 農術の設計思想（アーキテクチャー）

第5節 増収と安定をめざす個別適正設計

第4章 変容する農術の開発・普及・定着過程

第1節 大和農法にみる先駆け・普及・受容

第2節 ロジャースの普及理論に学ぶ

第3節 戦後の開拓的研究

第4節 風土を貫く農術遺伝子

第5章 日本列島における風土農法の流れと私たち

第1節 水稲反収の地域的多様性

第2節 雑穀・畑作・有畜からみる風土農法

第3節 日本列島の作付方式の流れ

第4節 作付方式からみる地域のかたち

第6章 農術から広義・大義の風土農法へ

第1節 温量指数にもとづく世界農業の四大類型

第2節 天然・人工農法から二一世紀は「天工農法」

第3節 永続する家と村は「ヨコ」社会

第4節 生きものの循環と響き合う農家生活リズム

おわりに 生きものの循環は「おかげさま・おたがいさま」の世界

『日本農史研究 下 「創発する風土」と農学』

はじめに「創発する風土」から農学をとらえなおす

第1章 欧米農学の直輸入から「日本」の発見

第1節 明治期から戦前までの農法論

第2節 久保佐土美・青鹿四郎の活躍

第2章 加用信文の農法論における生態学への転換

第1節 世界史の発展法則としての段階論的農法論

第2節 加用の生態学への理論的転換を活かす

第3章 飯沼二郎の農法論における風土論の限界

第1節 地域類型論的農法論からの農業革命論

第2節 静態的な飯沼農法論を動態化させる

第4章 熊代幸雄の農法論における生命論の意義

第1節 段階と類型を統一する比較農法論

第2節 生命意識による熊代農法論を受け継ぐ

第5章 守田志郎の農法論における生活的循環論の展開

第1節 戦後農法論のちゃぶ台返しと西欧モデルの否定

第2節 守田の虚像と実像、守田農法論を発展させる

第6章 椎名重明の農学思想論における「自然愛」への飛躍

第1節 「農学の思想」におけるマルクスの否定

第2節 クロボトキンの相互扶助論への共感

第7章 外から日本列島の農学をとらえなおす

第1節 中国・北京大学農村経済研究所からのまなざし

第2節 朝鮮農業試験場からのまなざし

第8章 「創発する風土」を発見する旅Ⅰ

第1節 古風土記から江戸農書へ

第2節 小野武夫と黒正巖

第9章 「創発する風土」を発見する旅Ⅱ

第1節 牧口常三郎『人生地理学』から黒澤西藏『農業国デンマーク』へ

第2節 二〇世紀から二一世紀の風土研究

第3節 三澤の「風土」から二一世紀の「創発・層序する風土」へ

第10章 「自前の農学」としての風土農学

第1節 明治農書の「経験」と「学理」

第2節 江戸農書は「自前の農学」

第3節 風土農学に流れる自然観の変遷

おわりに 日本列島の風土農学は、「おかげさま・おたがいさま」の世界

あとがき

幸いなことに、目次で見えるように上下巻ともに「はじめに」があり、そこで著者自らが要約を掲げているので縦糸の紹介は、それをまた要約することで代えさせていただくことにし、その後に横糸の感想を2、3述べることにしたい。

2 「縦糸」の構成

「忌地」は江戸農書から知られていた。「忌地」をめぐって、農業者、作物、土壌・微生物の3者の生きものたちの関係を探る。「害」は、いつから言われるようになったのか。さらに現代の農業者が書いた「現代の農書」や農学研究の先端の成果から学ぶ。

作物（光合成生産者）・農業者と動物（運搬者）・微生物（土壌形成者）が「生きもの循環」を形成してきた。三澤勝衛の作物風土論に基づき、農業者の栽培技術によって風土が形成されてきたことを明らかにする。「風土的認識」は、人間も含めた全一体の調和を重視した総体的な認識である。

筆者は奈良盆地の大和農法の水稲反収の500年の歴史から、小・大・超S字カーブを発見する。これを説明するために、収穫逓減の法則、いのちの技法、農術の内的発達法則、最適規模、生態均衡、設計思想、個別適性設計…と造語もあるという言葉が連発され考察される。

また、その農術の展開に農業者がどのような役割を果たしたかをみるための開拓的な研究が、ロジャーズの普及理論以前から日本でも行われていたことを示す。

次に、筆者が現在研究している庄内農法における水稲反収推移が「作付方式」の推移とともに取り上げられる。その考察が「水田」中心の「無畜」であり、「有畜」の視点が弱かったとの反省に立ち、日本列島の水田+畑、稲+雑穀・畑作物の「有畜」で複合的な風土農法展開の試論を大胆に明らかにする。

狩猟採集から半栽培や畑作、稲作が始まる時期を「天然農法」、稲作が伝来し国家に強制されていく6、7世紀頃よりを「人工農法Ⅰ」、13、14世紀頃より商業的農業が展開する時期を「人工農法Ⅱ」、1960年代より機械化・化学化・施設化が進む時期を「人工農法Ⅲ」とする。そして21世紀に有機農業や自然農法を組み込んだスマート農業も活用し「生きもの循環」に則っ

て創造されていく風土農法を「天工農法」と名付ける。

「おわりに」は、筆者が幼い頃より訓えられてきた「おかげさま・おたがいさま」という「言霊」を取り戻すことであると結ばれる。

さて、欧米農学の影響を受けて、社会経済史や世界史に従属した見方を「日本農学」と名付けると現場の「風土農法」とは「大きなすき間」があった。下巻では、「この「すき間」を見つめ、少しでも埋める努力をして、「風土農学」を考えてみる。」としている（「風土農法」も「風土農学」も筆者の造語とのことである）。

まずは農法論が本格的に議論されるまでの前史が語られる。明治期はおもにドイツ農学の影響を受けて「大きなすき間」があった。しかし戦前期には歴史と実態に即して「日本」を発見した久保佐土美と青鹿四郎がいて、三澤勝衛の「風土農学」の形成に寄与した。戦後農業の混乱期に、加用信文は世界史発展法則としての段階論的農法論を唱えるが、そこには「大きなすき間」があり、1970年代の日本農業は異なった展開をしたことから、生態的農法論へと転換した。一方、飯沼二郎は「風土」を導入した地域類型論的農法論による農業革命論の検討を通じてアジア・日本農法を提案した。「大きなすき間」は小さくなったが、静態的だった。熊代幸雄は日・中・欧の比較農書論からグローバルに考え「大きなすき間」はさらに小さくなった。「生命意識」「生命倫理」は「風土農学」の貴重な視点となるだろう。守田志郎は基本法農政の破綻・減反を批判する『農業は農業である』（1971年）を刊行して、加用・飯沼・熊代の戦後農法論をちゃぶ台返ししてしまう。次々と問題作を連発し初めて「すき間」が自覚化され、西欧モデルが否定される。そして、現在のコンピューターによる大量データの処理が当たり前の研究状況に対し、先人たちの研究は真正面から農業の現状に対峙してきた蓄積であり、「風土農学」を創り上げるための「宝の山」である。

次には、別の視点からまず椎名重明を取り上げ、最晩年の著作まで検討することで、マルクスの農学思想を否定し、クロボトキンの相互扶助論へ共感していたことを明らかにする。戦前の中国・北京の農村経済研究所での熊代や西山武一、渡辺兵力らの研究、朝鮮農業試験場での高橋昇らの研究は現場の農法・農学との「すき間」を埋め、「風土農学」に近づいていった。日本に帰って来てからも研究は続いた。

続けて、「風土農学」を考えるポイントが述べられる。「風土」は固定したものではなく「動く」のである。時代を経て新たなものへ「風土は創発される」。古い「風土は積み重なる」、そして「風土は多様」である。この視点からまず8世紀の古風土記を検討し、17世紀頃の「人国記」や江戸時代の地誌で「風土農学」を江戸農書に探る。続いて、小野武夫と黒正巖を紹介し、三澤の作物風土論にも影響を与えた牧口常三郎の『人生地理学』を取り上げる。北海道酪農を開拓した黒澤西蔵の「健土健民」、畜産を組み込んだ循環農法論も重要である。三澤再評価のきっかけを作った気候学の矢澤大二、土壌学の横井利直の「生物学的輪廻」、玉城哲らの農業水利論、田村雄一の「風・水・土（ふうど）」論、さらには、河川地理学の大矢雅彦、地誌学の田中啓彌、放牧に関する安田初雄と石田寛の研究を紹介する。最後に、明治農書から明治期の現場の「経験」と農学士たちの「学理」がせめぎ合う中で、両者はどのように農学として溶け合ったのか。江戸農書ではどうなのか。「風土農学」に流れる自然観の変遷から、中国・インド・欧州の外来思想とどのように溶け合ってきたかを検討する。

「おわりに」では、日本列島の風土農学は風土農法と同じように、「おかげさま・おたがいさま」の世界であることが主張される。

3 「横糸」的2、3の感想

本2部作の概要を紹介するだけで、書評とし

ては異例の長さとなってしまった。それだけ内容が豊かであることを農業技術に携わる者であれば、ここまで読んでいただければ推察いただけたものと考えている。しかし、このような概要紹介だけでは、筆者のめざす「風土農法」「風土農学」の生きた息づかいは伝わってこないだろうし、評者がさらに説明を加えることで、そのような息づかいを読者に伝えるだけの力量は残念ながらない。ぜひ、自ら本書をひもといて自ら確認してみてほしいのである。

最後に、本書を読みつつ、評者が抱いた断片的ないくつかの感想を簡単に述べて、本書の農法・農学事典的側面の一端を紹介し終わりたい。

まず上巻2章1節の門司正三・佐伯敏郎の群落光合成理論である。すっかり忘れていたが、数式を使い群落全体、農学的に言えばほ場全体の生産力を予想しようとする研究であり、評者が農学研究に関心を持つことになったきっかけの研究であった。その概要が紹介されている。現在、ICT利用による収量予測へと手法は大きく変化しているが、その水脈は現在につながっている。

次は、上巻2章2節の微生物生態学の栗原康である。本書では1998年に刊行された『共生の生態学』が紹介されているが、評者が影響を受けたのは1975年刊行の『有限の生態学』である。限られた生物と資源をガラス瓶に閉じ込め光だけが降り注ぐシステム論という閉鎖系で、生物たちが生き続けられるかという、現在のテラファーミングにつながる研究であった。生態系を厳密に定量的に考察する視点を教えられた。

最後に、下巻3章2節で紹介されている石井米雄の「農学的適応・工学的適応」に触れておきたい。評者は30年ほど前になると思うが、金澤夏樹をとおして知った考え方である。その後、評者が農業技術について考える際にいつも参照する重要な視点となっている。

その他、上巻4章2節、3節では、ロジャーズをはじめ農業普及関係者にはよく知られた研究者らが紹介されているし、上巻6章3節の「説得」から「納得」の農家継承へ」では安藤義道が、4節の「農家生活リズムから地域社会リズムへ」では神田三亀男が紹介されている。

「風土農学」は、現場の「経験」と研究者・技術者の「学理」がせめぎ合う中で融合して実現する農学であるとされているのであるから、農業普及研究と重なるところも大きいからであると考えられる。



日本農業普及学会からのお知らせ

目次

<日本農業普及学会支部報告>

◆北海道農業普及学会の活動状況	24
◆栃木県支部の活動状況	26
◆長野県農業普及学会の活動状況	27
◆日本農業普及学会令和7年度春季大会・総会開催要領	29
◆日本農業普及学会春季大会の研究発表募集と原稿作成要領	31
◆令和7年度調査研究助成の追加審査について	32
◆令和7年度日本農業普及学会賞の推薦依頼	35
◆令和8年度「農業普及に関する調査研究助成事業」の募集	36
◆日本農業普及学会役員 第16期	37
◆委員会委員 第16期	38
◆日本農業普及学会事務局からのお知らせ・お願い	39